

文字を工夫する日本人

— かな発達の意義 —

飯島 利一

Toshikazu IJIMA

一 はじめに

本校では、例年一月末に、卒業後の進路の決定した三年生を対象に、「特別授業B」を実施している。この授業は、教科書を中心とした教科内容から離れ、教員の裁量で比較的自由なテーマを扱うことができる。この機会を活用して、これまで「授業づくり」の研究会でとりくんできたオリジナルの授業案の実践を試みてきた。おもに日本の歴史と文化に関わる素材をとりあげ、ふだん無自覚な自国文化への理解と愛着を育むことをめざす内容である。

昨年度の『外苑春秋』では、「さくらと日本人 桜に託された日本的心情」と題した授業実践を報告した。さくらをテーマにした最近のヒット曲を手がかりに、古代・中世・近代に詠まれた和歌を資

料として、さくらに対する日本人の心情を探る内容である。

今回は、私たちの先人たちが、いかに「文字」を工夫してきたかを学ぶ授業の実践である。具体的には、わが国が古代に「漢字」を輸入してから、どのように「かな」文字を発達させていったのか。その過程を追うことで、外来文化に対する日本人の文化の意識を探っていくことが、授業のねらいとなっている。

以下の授業の展開では、実際の現場の雰囲気に近い形で報告したい。○印を付したものが生徒の発言である。また【問題一〜四】および【資料一〜六】、【授業の感想】は、ワークシートを用意して、授業中に生徒に記入させたうえで発言させた。

二 授業の展開

(一) 日本の文字について考えてみよう

ファッション誌などの雑誌をひらくと、あらためて、いろんな種類の文字が使われていることに気づかされます。注意してみると、漢字、ひらがな、カタカナ、アルファベットもあれば、アラビア文字(数字)さらにフリガナの小さい文字など。にぎやかで、多様な文字があふれています。

日常ほとんど自覚することはないが、わたしたちは一つの文章の中でさまざまな種類の文字を、当たり前のように瞬時に読み分け、

使い分けているのです。そのため、日本人の文字は、複雑なものと言われています。具体的に確認しますから、次の問題を考えてみて下さい。

【問一】「せんこう」と読む漢字を、思いつく限り書いてください。

○大学の学部・学科の「専攻」とか。

○お墓参りのときの「線香」。

○つよい光があらわれる「閃光」もある。

○野球の「先攻・後攻」の「先攻」でもいいでしょ。

○先生のこと、「先公」(笑)。

いくつ書けたでしょうか。「線香・専攻・閃光・先攻・先公(笑)」など、さまざまな意味の熟語がありますよね。ほかにも「戦功・選考・先行・潜航」と。アクセントの違いはあるけれど、同じ発音の言葉なのに、文字であらわすと何種類もあります。私たちは自然に、文脈や会話の中からその漢字を当てはめて理解しているのです。

【問二】「十一月三日」はちょうど祝日で日曜日です。日の字をそれぞれどう読みますか。

○みっ「か」、しゅく「じつ」、「にち」よう「び」。

皆さんは当たり前のように読めますね。短い一文の中に4回も同

じ文字が出てきて、すべて読み方が違います。あらためて考えてみると、私たちは、ほとんど一瞬に判断して読み分けている。かなりすごいと思いませんか。

このような言語と文字の例は、世界でもきわめて珍しい。そのため、日本人の文字は、風変わりな複雑なものと言われています。どうしてこのように複雑になったのでしょうか。日本人は、「文字」とどう向き合い、どのようにつきあってきたのか。これから、それを具体的に探ってみましょう。

(二) 漢字が入ってきた

日本人が最初に出会った文字は、漢字でした。我々の先人が漢字を文字として使用するようになるのは、諸説ありますが、遅くとも四〜五世紀くらいのこと、古墳時代には漢字の使用がみとめられます。

【問三】漢字には、法律・宗教をはじめ中国文明の学ぶべき情報がたくさん詰まっていた。漢字を学んだ日本人は、しだいにその文字を自分たちの社会に役立てようと考えようになりました。そこで、当時の日本人はどうしたでしょうか。

(a) 漢字を使いこなすために、当時の日本語(やまと言葉)をやめて、漢語(中国の言葉)で話す術を身につけようと努めた。

(b) 自分たちの言葉(やまと言葉)を文字で表そうと、漢字の音

(発音)を利用して当時の日本語(やまと言葉)を書き表した。
 ③漢語(中国の言葉)を話すことはできなくても、文字の意味がわかれば文化は吸収できるので、漢字を強引に日本語で読んだ。

簡単にいうと、①は、自分たちのしゃべっていた言葉を捨てて中国語を話すようにしたこと。②は、ちよつと乱暴な説明になるけれど、よく暴走族がやる落書きで「ヨロシク」を「夜露死苦」みたいに書いた。③は、現代の私たちのイメージに近づけるために、強引に英語に喩えて言うと、たとえば「DOG」という文字を、自分たちの言葉で「いぬ」と読ませた。訳語をそのまま「読み」にあてたということです。

○日本人みんなが、日本語をやめて中国の言葉を話せるようになるのは、ちよつと…。①は無理だと思う。

○②もわけが分からなくなるじゃないかな。混乱すると思う。

○やっぱり③かな…。

皆さんはどのように考えましたか。じつは②③の2つが正解です。まず②の場合から具体的な事例を見ていきましょう。

【資料一】

① 獲加多支鹵

② 巷宜有明子

③ 有麻移刀等巳刀弥弥乃弥己等

資料一の①～③はいずれも歴史上の人物名をあらわしています。

①は稲荷山古墳出土の鉄剣銘に刻まれた文字で「ワカタケル」と読みます。雄略天皇のことです。五世紀の「倭の五王」で学習しましたよ。②と③は読みづらそうですが…。七世紀はじめ、推古天皇のころの超有名人です。正解は②が「蘇我馬子」(ソガノウマコ)、③が「聖徳太子」です。聖徳太子は厩戸皇子(うまやどのみこ)でしたね。③をしつかり読むと「うまやととよみのみこと」となります。

それでは次に③の例を紹介します。次の資料は有名な文章ですが、読める人はいますか。

『日本書紀』に記録された「十七条憲法」の一節です。

【資料二】

以和為貴、無忤為宗。

(やわらかなる(わ)をもって、とうとしとなし、さかうることなきをむねとせよ。)

聖徳太子の憲法十七条の第一条でしたね。この文章は、漢字ばかり並んでいるので一見漢文風だけど、実はやまと言葉でないと読めない文章なんです。漢字を強引に日本語で読んだ例です。たとえば「和」という字は本来「わ」としか読みようがないのに、「やわら

か」という日本語の訳(意味)で読ませることにしたということです。以上の2つの資料から確認できたことをまとめましょう。⑤の表記を音仮名と言います。◎は訓書きという方法です。漢字による日本語の表記は、音仮名という中国文字の音をつかったものと、訓書きと言って日本語の訳をあてるものと2種類あるのです。中国の文字を学んでも日本の言葉捨てずに両方を使い分けたということです。

ここまでいえば、漢字には音読み・訓読みがあることに思い当たるでしょう。音読みは中国語的な発音の読みで、訓読みは日本語で訳した読み方なのです。

とりわけ、訓読み・訓書き方式の発明は画期的だったと言われていきます。と言っても、みんなは小学生の時から訓読み・音読みを体得させられているから、驚くに値しないかもしれないけれど…。

例えば「山」を「やま」とよむのは当たり前と思うでしょう。しかし、これは相当奇抜な発想なのです。現代の私たちの感覚に近づけて言うと、mountainという英語がありますね。これはマウンテンとよんで「山」のことだと習いますが、英語のmountainを直接「やま」と読むのだ、dogと書いて「いぬ」と読む、catと書いて「ねこ」と読むのだと言われたら、相当戸惑うでしょう。私たちの先人たちは、見ようによってはかなり大胆なことをやってのけた。すなわち訓読み・訓書きは、漢語(中国語)として読む以外にないものを、自分たちの言葉で読むこととし、内容豊かな古代中国

の古典などの学習を可能にしたということです。

ちなみに④の場合をとっていただろうなっていましたか。たしかに当時の日本人は漢語をかなり懸命に勉強したでしょうが、決してやまと言葉(日本語)を捨てようとはしませんでした。もし自分たちの言葉を捨てていたなら、中国文明の影響によって、日本独自の文化形成は阻まれていたかもしれません。たとえば、フランスの植民地だったアフリカの地域では、国の指導者はフランス語を話し、一般の民衆は現地語で会話するので、その国の文化の独自性が阻まれているという例があるのです。

(三) 万葉仮名という方法

漢字を学んだ日本人は、しだいに自分たちの言葉に近づけて文字を表そうと模索します。純粋な日本語を写そうとしたり、声に出して読めるようにするには、語順や助詞などを含め、表記を日本語に適した形にもっていかざるをえない。しかし、そもそも中国語には助詞がなく活用もない、さらに語順も違います。そこで、当時よく使われていたのが万葉仮名です。漢字仮名交じり文ともいい、万葉集で使われていた日本語の表記方法なのです。

【問四】 次の文字は暗号のようにみえるが、実は『万葉集』巻第

三・三一八 山部赤人の和歌(日本古典文学大系『萬葉集一』)。訓として読む漢字(訓書き)と音として読む漢字(音仮名)とを区別して解読してみよう。

田児之浦従 打出而見者 眞白衣

不盡能高嶺尔 雪波零家留

読めますか。傍線部を助詞・活用語尾と判断すると分かりやすいと思います。正解は「田児の浦 打出で(て) 見れば 眞白にぞ 富士の高嶺に 雪は降りける」となります。意味は、「田子の浦(現在は静岡県富士郡)を通って(眺望のよいところに) でてみると、真っ白に富士山の高嶺に雪が積もっていることだ。」雪化粧をした富士山とは、実に日本的な風景ですね。

よく間違えてしまうところは、「白衣」を「はくい」「びやくえ」とよんでしまうことです。やはり「しろいころも」と思ってしまうますよね。でも答えは「眞白に」。「衣」の字を助詞として音仮名で読んでいいのか、「ころも」と訓で読んでいいのか、わかりづらいのです。全部漢字で書かれているので、その区別が難しい。和歌のように五七五七七と定められていればそれに合わせて読めばよいが、散文では訓としての漢字と、音として読む漢字としての漢字の区別がよけいに困難になります。そこで、ひらがな・カタカナが登場してくるようになります。

(四) ひらがな・カタカナの「発明」

日本人の文字は、平安時代中期、いわゆる摂関政治の時代に大きな転換期を迎えることになります。すでに9世紀ころから唐の衰退により、その文化の影響力は低下していて、漢字をもとに略した

り、部首をとってみたり、独自の「かな」が用いられるようになります。たとえば「ひらがな：安IIあ 以IIい」「カタカナ：阿IIア 伊IIイ」となります。

【問五】 当時の日本人が発明したひらがな・カタカナはどのように生み出されたのでしょうか。

① 唐に対抗して、日本独自の文化をつくろうという国風文化の風潮のなかで、天皇や摂関家など朝廷が中心となり、国家事業として「かな」を制定し日本の文字として推奨した。

② 貴族社会のなかで、日常の細々とした記録や消息、本の書きこみなどから字形の簡略化がすすみ、自然発生的に「かな」は生まれてしだいに普及していった。

平安朝廷が国家事業として「かな」を制定したのか、それとも自然発生的に生まれたものなのか、どちらでしょうか。正解は②です。中国の文明の象徴である漢字の威厳にとらわれず、日本では実用性から労力経済が働き、しだいに文字を簡略化する方向にいったと考えられます。

日本の「かな」は実用性から出発したために、しだいに庶民にも広まります。ところで中国では、文字は支配階級(士大夫)の特権だったらしい。文字は生活に余裕のある者だけが学べるものであり、一般大衆を寄せつけなかった。だから漢字には威厳があり、その

ためには必要以上に難しくないといけないという風潮があったようです。その点、情報伝達の手段という実用性から生まれ、やがて広く庶民にも普及した、日本人の文字は中国の場合と対照的です。

(五) まとめ 日本人の文字

①「かな」の発明が日本の文化を生んだ

日本人にとって、「かな」が生まれたことはどのような意味があったのでしょうか。その手がかりとして、平安時代の初め、『古今和歌集』を編纂した紀貫之が著した「ひらがなの序文」(仮名序)を紹介しましょう。

【資料三】

「やまとうたは、ひとのこころをたねとして、よろづのことはとぞなれりける。よのなかにある人ことわざしげきものなれば、心におもふを見るものきくものにつけていひいだせるなり」

(意訳)「和歌というものは、人の心の中にある感情を核として生まれた言葉によってできている。世の中に生きている人間にはいろんな事が起きて忙しいけれども、その忙しさが人間に働きかけて、いろんな感情を生む。その感情があるからこそ、人間は何かを見たり聞いたりするにつけて、自分の感情を形にした歌を詠むのである。」

これは和歌について語る文章ですが、人間の感情の発生を語る文

章でもあります。そして日本人にとってその心を最もよく表現する道具は、外国語である漢字や漢詩ではなくて、日本製のひらがなであったことを示すものです。

自分たちの考えや気持ちを自分たちの言葉と自分たちの文字で、何の束縛もなく自由自在に記しうることに、そして日本的感性を育んだこと、この重要性はいくら強調してもしすぎるということはないでしょう。

さらに言えば、『古事記』『万葉集』から『竹取物語』や『源氏物語』『伊勢物語』『平家物語』、さらに歌集・日記類から随筆『徒然草』に至る膨大な「かな古典文学」とも言えるものが創造されるようになりました。これがなかったら、現代の日本文化はなかったと言えるでしょう。日本人は「かな」をつくり、「かな」が日本の文化をつくったということなのです。

②漢字を捨てなかった日本人 その理由

「かな」ができたからと言って、日本人は漢字を捨てたわけではありません。むしろ積極的に漢字の良さを、自分たちの文化のなかに取り入れようとなりました。漢字を巧みに工夫して、独自に発展させていったのです。いくつか具体例を紹介しましょう。

【資料四】

① 鯛・鰹など魚片の漢字

② 政界・政局・政断など「政」に関わる語句

③「はかる」という日本語 Ⅱ「計・図・測・謀・量」の使い分け

①は日本人が元来の漢字にはない日本製漢字を生み出した例。②は漢字を組み合わせて、日本人はあらたな造語をつくった例。③は漢字を使い分けることによって、一つの意味であった和語（日本語）が精密化された例です。

【資料五】

背景 理想 版画 不動産 領土 理性

これらの語句は、中国の外来語辞典に日本の語として掲載されたもの、和製漢語です。驚いたことに、日本人がつくった語句を、現在、中国人たちが使用している例なのです。いわば、ちょうど漢字の「逆輸入」ともいべき現象がおこっている。それだけ日本人は漢字を自分たちのものに消化したことを示しているのではないでしょうか。

③日本人の外来文化に対する意識

最後に、山本七平氏の一文を読んで終わりたいと思います。私たちの先人が、「文字」をはじめとする「文化」と、どのように向き合ってきたかが分かります。読み終えたら、今日の授業で学んだこと・感じたことをまとめましょう。

【資料六】

日本人は、かなによる自国の世界を生きつつ、同時に漢字という当時の東アジアの「世界文字」につながって生きていたということ。すなわち日本の独自性と世界の普遍性を併せもつことで日本の文化が形成された。その姿勢は多様性を認めるということ。漢字を捨てず平仮名・片仮名など文字や文章に統制を加えず、自然のままにしておく。日本人は、文字をはじめ文化に対して多様性を尊重する民族と言えよう。今日私たちの周りにある衣食住をみても思い当たる節があるう。（山本七平「日本人とは何か。」）

三 生徒のおもな感想

今日の授業を学んで、思ったこと・考えたこと等をまとめて、感想を書きましょう。

○日本は中国の文化を取り入れてばかりで、自国の文化を守っていたのかと、いままで少し疑問に思っていました。でも今日の授業で、かな文字成立までの流れをしっかりと見つけ、日本人は独自の文化を守りつつ中国から取り入れたことを活用していたのだと分かりました。

○今まであまりふだん当たり前に使っている文字について考えたことがなかったけれど、学んで見ると、日本人の性格や考え方が分か

った気がした。中国のさまざまな情報が日本に入ってきて、漢字を学び始めたとき、漢字を社会に役立てながらも日本の文化を捨てず、吸収する形で取り入れたことがとても印象に残った。中国語をそのまま取り入れてしまったら、多くの素晴らしい和歌や俳句は生まれていなかったと思う。

○日本語は日本独自の言葉であるから、本当に他の国々には見られない特徴を持っているな、とあらためて思いました（ナイス！ジャパン）。とくに面白いなと思うのは、音読みと訓読みがあることです。一つの文字で二つの読みがあるのは日本ぐらいだと私も思います。中国文化を学んでも日本文化を捨てず、更なる日本語の発展（いろは歌とか、カタカナとか）につなげていった先人の人々は、さぞかし賢かったのだらうなと感じました。熟語の組み合わせも漢字の意味や内容が一致しているところが美しいなと思います。日本語でしか言い表せない言葉の美しさも含めて、これからしっかりとした日本語をしゃべっていきたいです。

○漢字が中国から来たというのは知っていたが、その後、どういう風にかな文字ができたのか知らなかった。一番すごいと思ったのは、日本人が中国文字の読みと自分たちの作った読みの両方を使っていたことだ。自分たちの使う語をすてないで、取り入れたところがえらいと思った。

○毎日私たちが何気なく使っている文字には、とても深い歴史があるということを知り、今回の授業で学んで、日本特有の文字がもっと好きになった。千年も前にその文字を作った人たちの思いを受け継ぐためにも、最も文字に触れる機会をつくらなければならないと思った。今回の授業は、今まで気づかなかった日本にだけしかない文字について興味をわかせてくれて、とても意味がある授業でした。

○今回の授業は「日本語」について詳しく学べたので、とても面白かった。日本語は、自分の中では使えてあたり前の言語だけれど、こうして歴史的に見ると、日本語というのは難しく、またとても普通では考えつかないような考えから生まれたもので、昔の人々から今の人々への大切な贈り物のように思えた。日本語を使っている日本人として、言語の由来をしっかりと学び、受け継いでゆくことが必要だと思う。

○国風文化は好きなどころなので、今日みたいな授業は面白かったです。中国の文字を学ぶだけでなく、それを自分たちの言葉に組み込んだり、新しい文字まで作ったりして、昔の人は頭がいいと思いました。平かなを作ってくれて、自分たちの言葉を表せるのはとてもありがたいと思いました。こんな面白い日本に生まれてよかった。

【参考文献】

- ① 山本七平 「文字の創造」 『日本人とは何か。』 P H P 文庫一九八九
- ② 樺島忠夫 「漢字からローマ字まで」 『日本語の歴史』 大修館書店
一九七七
- ③ 樺島忠夫 『日本の文字』 岩波新書一九七九
- ④ 小松茂美 『かな その成立と変遷』 岩波新書一九六八
- ⑤ 西尾幹二 「日本語確立への苦闘」 『国民の歴史』 一九九九
- ⑥ 高島俊男 『漢字と日本人』 文春新書二〇〇一
- ⑦ 大野晋 『日本語はいかにして成立したか』 中公文庫二〇〇二